

30

20

10

0

mm

inch

成形圖說 菜蔬部三十



成形圖說

特別
二一
144
29

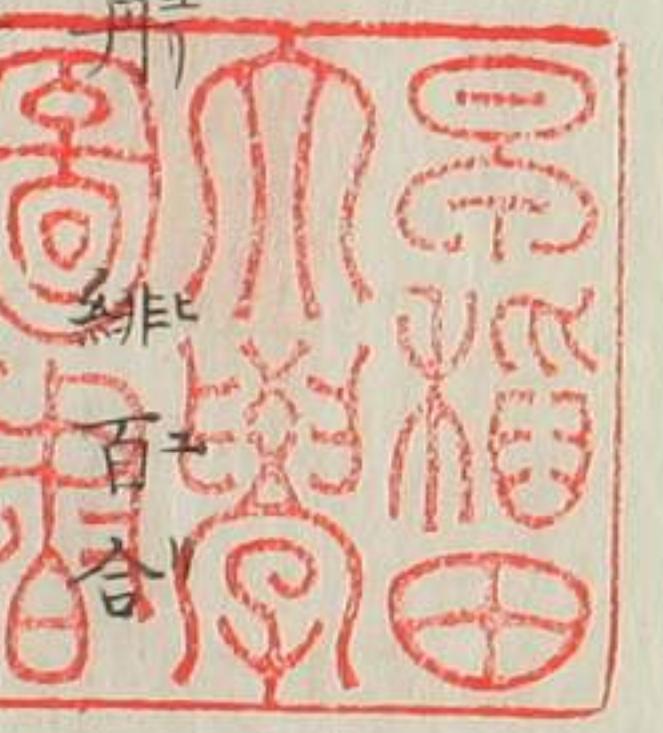
成形圖說卷之三十

目錄

鼠 雞 卷 野 百 嵴 款 冬
麌 兒 丹 合 合 合 芳
艸 腸 附 附 附 附

扇 附 扇 附
百 合 百 合 百 合

鷹 承 承 承
百 合 百 合 百 合



車 琉 球 百 合
百 合 球 百 合

黑 為 朝 百 合
百 合 為 朝 百 合

附
薪賞

藜 蒲公英 灰蘿 馬齒莧 地膚 蔡
アガサ アガサ ソクヅクシ ナカサ ハグサ ハグサ
アガサ ハグサ ナカサ ハグサ ハグサ ハグサ

成形圖說卷之三十

布夫伎 菜部野蔽

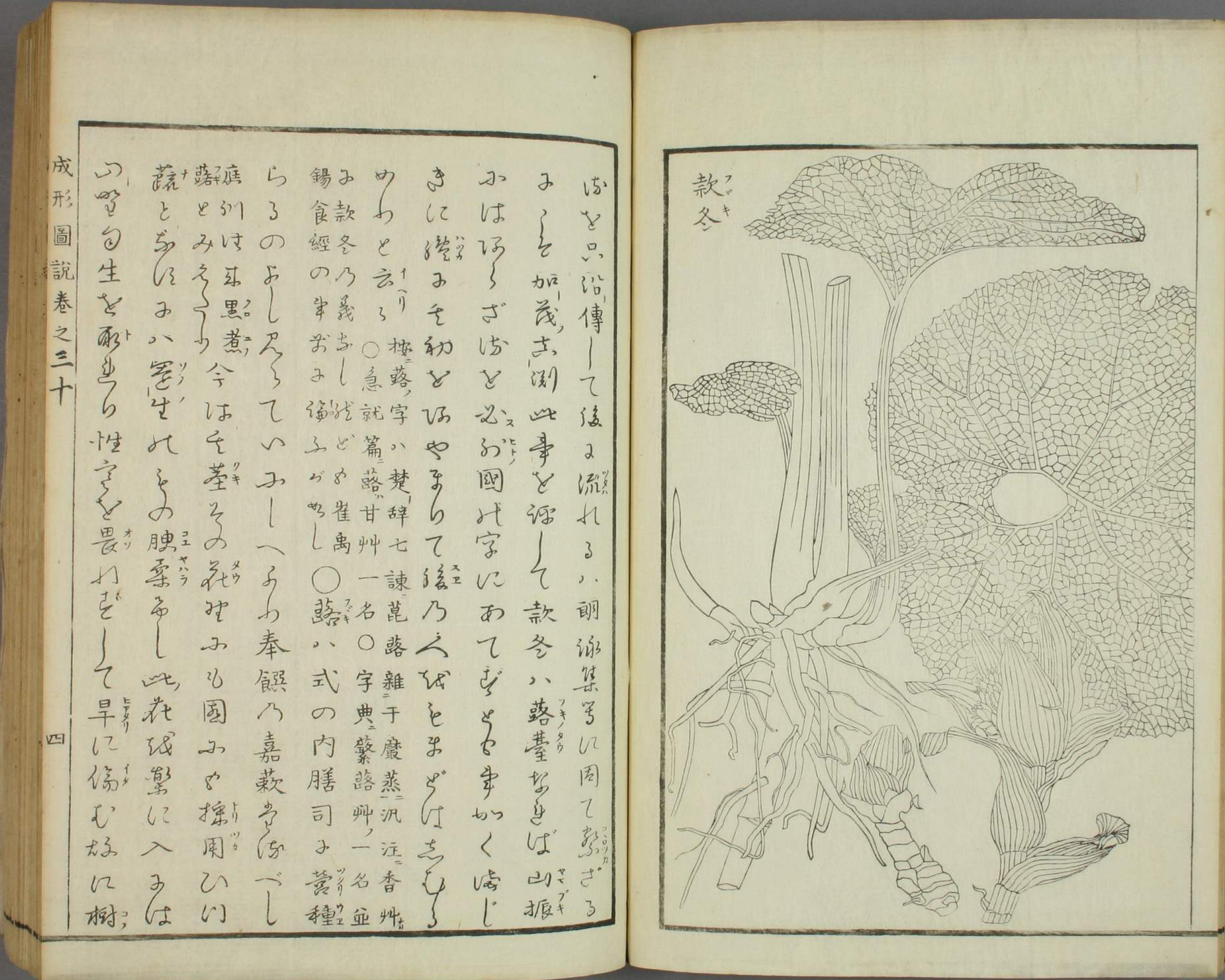
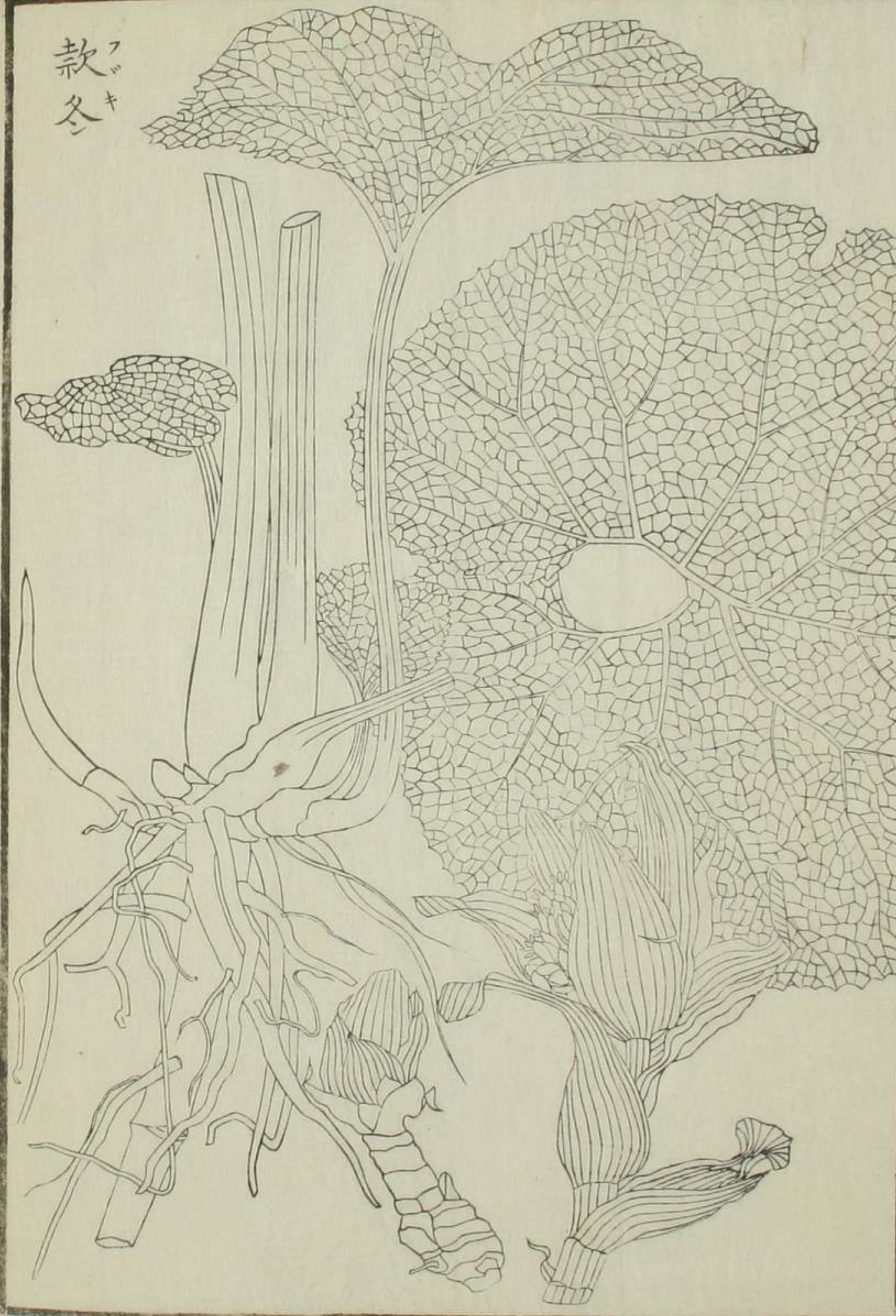
花と巾ひ宮書み用と轉ふ氏是
色穂子と鈔舍は此らに蓬、曰ふ
の久食れる得名、書ての新
の向きと巾條綱くハる類又み夫殿字
にやば子み目施諸唐今雪、れ頭の樂鏡
因是云の高の本の乃曰バ髮下に○
身へ冠巾劉子崔本布我班乃布本
もてモ乃子禹み諸禹艸夫を雜夫布朝
名也子額言錫や韻錫字伎お源内
に布らに吹ヒ崔書が書亦と順韻と膳
了夫バ綿振ハ禹み食み此ら集とい式
とほ綿の六別錫も経い義どに切ヘ布
ハ了ヒ造位人は引みそ也落君てる伎
造花以崔用み義又和宇布艸と
造花と綿の融されズ曰名ば伎名に
づとは着襷とがバえ和布等と即
ハ向る面方子事そび名夫あハ傳敷
其さりと開を物さふ伎社ふふ冬
坂よりみえしよれ以鵠め布セ
み面の抜中かくど其馬り々盤
吹とソマノのあそと花繁谷伎涉
振は或西中邦へ引落如の川を調

成形圖說卷之三十

二

誤アレハ昔時橐吾のキビ山布夫はと称へて之に紛れ
ゆきり細目み跡橐吾と款がども江談鈔曰昔大隅守清
原為信曰故親父典藥頭眞人相談曰昔中書大王為大納
言時詣大王第地富風流天縱煙霞當青陽之時暮見黃花
盛開于時大王憑欄檻吟詠點著雌黃天有意款冬誤綻暮
春風之句爰真人從容言曰款冬和名不支見於本艸其
花冬開今以款冬為山吹名誤也於是中書大王感悟
此款冬綻暮春風と云句は清慎公朱雀院所作也と云
モヘバ款冬の字と棣棠の名互換しハ源順の前み在
て當時典葉既人既くを寫すがる城知ふと云ひ

はと只沿傳にて後又流れる。朗詠集写にて有ざる
みと加茂、ま渕此事と呼して款冬ハ落葉^{フキノタウ}をもば山振
かはゆ^スづかと必^スい國代字にあてどどもすかく清じ
きに能みを初とひやありて絶乃人世をあざけらる
ゆふと云ふ。○急就篇^略甘艸一名。○字典繁^略艸一名。並
み款冬乃義あし哉^ト崔禹錫食經の半^トおみ儀^トがめし。○^略ハ式の内膳司^ト營種
らるのよし^トてひふへと奉饌^ト嘉歎^トべし
庶^トみ^トは耳^ト黒^ト煮^ト今はモ茎^トの花^トせふも圓^トみ^ト也^ト採用^トひい
蔬^トとあはみハ寒^トせれ^トの脾^ト柔^ト希^ト此花^ト成^ト繫^トに入^トは
つ^ト生^トと取^トり性^トを畏^トれ^トて旱^トに傷^トむ^ト木^トに樹^ト



陰水傍によろし性南、部津經松お及、ハ那夷に產るハ
その花鍾の大、色き莖の周、み寸葉の徑三尺、許もて
傘子代て急雨防ぐと云、南郊みてハモ莖城塙糠子和モ
麴て遠に寄るゆす又號河國石田のは園、六七寸葉大
きハセハノ莖の也、九尺許、者甚る是故久能山の裏、
併に上るといふ著々集承安二年五月二日東山の仙洞
みて御舍の事、ゆりくり公に付は小面の室つみ紙候
の者、どもた右み可く、中お歌度歌の翼にゆつて地
臺一面をおく五節を物の臺也おとし數各とひすびて
うあつる○一種赤款冬花、各ゆり莖茎花房並に紫あり、
紫

花青葉の者、ゆり尋常の種より葉莖巨大俗名唐蘿、
へア株み花鏡云有紅花者葉如荷而斗、俗呼為蜂斗葉、
此類也、し○落乃初出芽俗言落薹亦之と姑と呼べて
冰雪に積て初冬、ゆり先荳苞と芽にふと叢荷花の如
之、刈みハ根おと切づく又燐て油に浸しあるハ味留
き蔓、と金華ふ酒と嗜ミ若ハ瘡癩の人宣し生身、
桶、空乞ひべし○此豆の味苦し而と本艸に味辛と
ハ供生、但ち土の黒みて氣味乃斯土と別あるは、
スえふぬみか、らんみハ葉など功徳相反、人ん

と忌ばれめやは漢董仲舒云款冬華於嚴冬又晉傳
氏本艸款冬十二月五花かどられど唐張藉カタシ詩僧房
達著款冬花出詩吟行日已斜十二街中春雪遍馬蹄今去
入誰家是花の方み冠ぬる
ハ春月子在とえろべし

茎氣味微苦冷あり毒なし野生の大苦し○主治心肺と
清し五歳と利し燥と潤し同と除き痰と消し固ぜ咽に
以肺瘻肺癰及び風症を患ひ人此とくらみておし膚弱
及老人忌び○花茎味苦く微辛く微温毒なし○茎味
軟逆上氣喘息喉痺山凹の熱痛寒熱邪氣みよし○茎味
て何虫と云ふは根葉皆腫痛み葉揉て仔べし○根て
塙壤等の碎と呑て咽み便りに根と燒て灰とあし舌

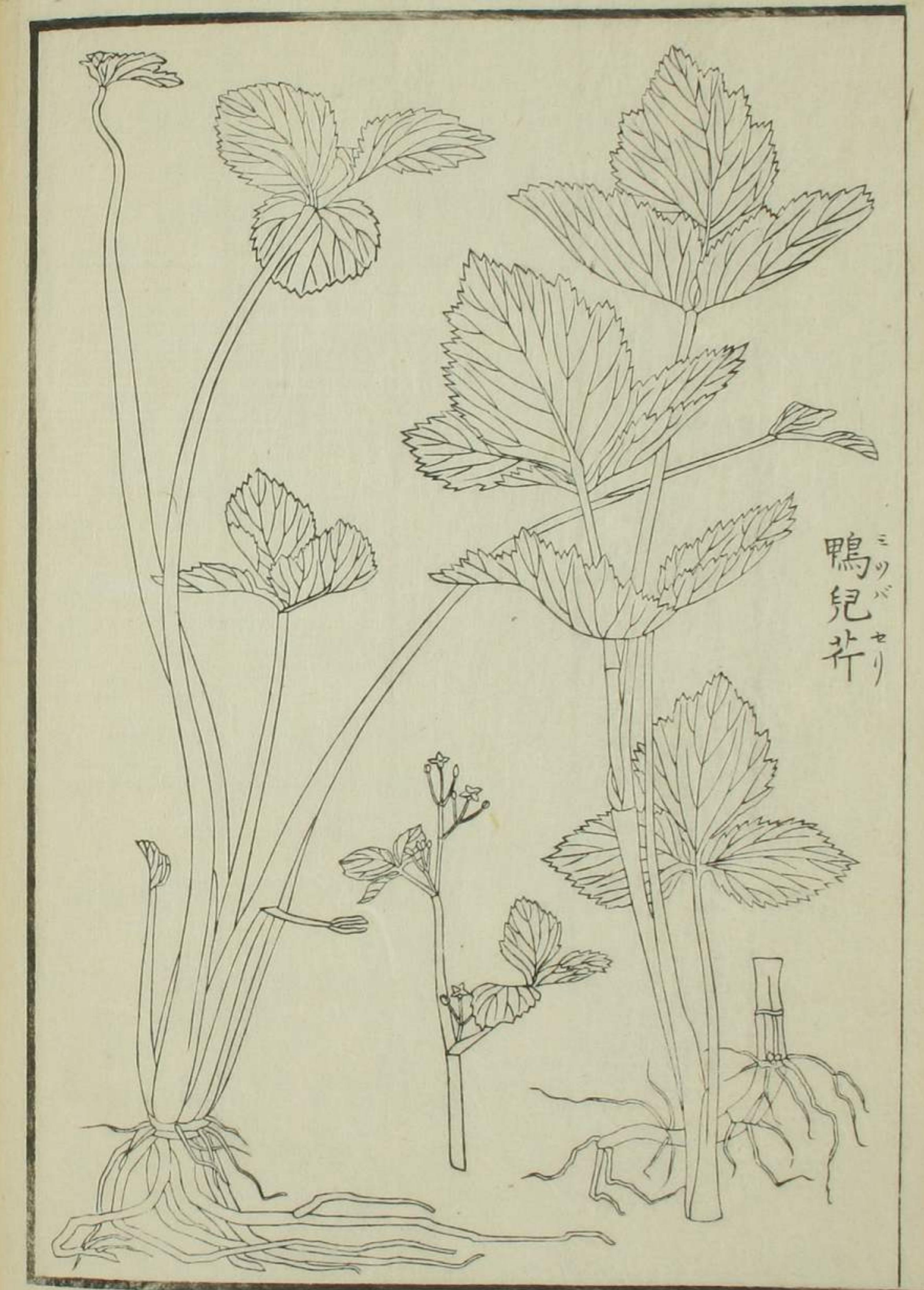
の上み点べし○諸魚の骨咽み鍼子るは花の末城吹入
あるをあゝ蒸し圓ふ花か子時ハ根とどり割て濃く蒸
じ用ふべし以上解○湯て硝子の碎片ば吞咽子哽下ら
ぞ死かんと云ふ花根莖せに焼灰みしまとなし向陽
み向陽べし○小兒初生み根と割と黄連甘草少許とか
て白湯みて擗出飲むべし口中の穢物と吐出し以上朝
經○疔腫ざるみ根と取搗てばれば瘡根拔るあり○口
中の瘡瘍み根冬花と黄連ちまとすし瘡とすて潤へ
解のぶとくし先地狀子煎湯を以て口と漱ぎ後に解子
とげれば食頃あくまで瘡がのづら消ありみ花を乾

し火と傳管を以て烟を吸ひに満海日呑みとみ七返
烟斗をぬぐめくみとくし○款冬花散妊婦の咳嗽にて
塞る用款冬花麻黄貝母炮て身お胡桑白は紫苑あ旋
の用款冬花散妊婦の心膈み痰
蓋み姜三斤入り七分に煎し滓と瀝て温酒みて食後み
腋○款花園小兒の喉塞ハ解き瀝て温酒みて食後み
心吸い二休就月干か一四味鋼末し蜜みて匀て乳にみ塗
ふハ款冬花乾根細末みて用み以上方
根ふき水ふし粉ふし紫元子みかづ用ふつま上方
根ふき水ふし粉ふし紫元子みかづ用ふつま上方

成形圖說卷之三十

八

蕃名卫ツベ ハン ゴローテ ブラーデレン
べくらざね
此の湿蔭の地と好し舊根より叢生至七月の秋苗は
牛蒡比輩に似て茎に葉一科數莖ともありて倒
生ぬ莖も四みす内扁くわゆて微淡紫色と希ぶも
丙子の晨葉艸の一朶み數十丈葉陽ハ深緑毛葉ハ津
也三葉なるとて名あたる或曰山よのは古音み透
玉具て山よのあり故み透と芳也と通ふといひとて
夏末れバ草を挿てやさみ七寸莖無に小葉とうち青向
き碎花と着小實を結ぶ實處所皆株生或生豆○化芽

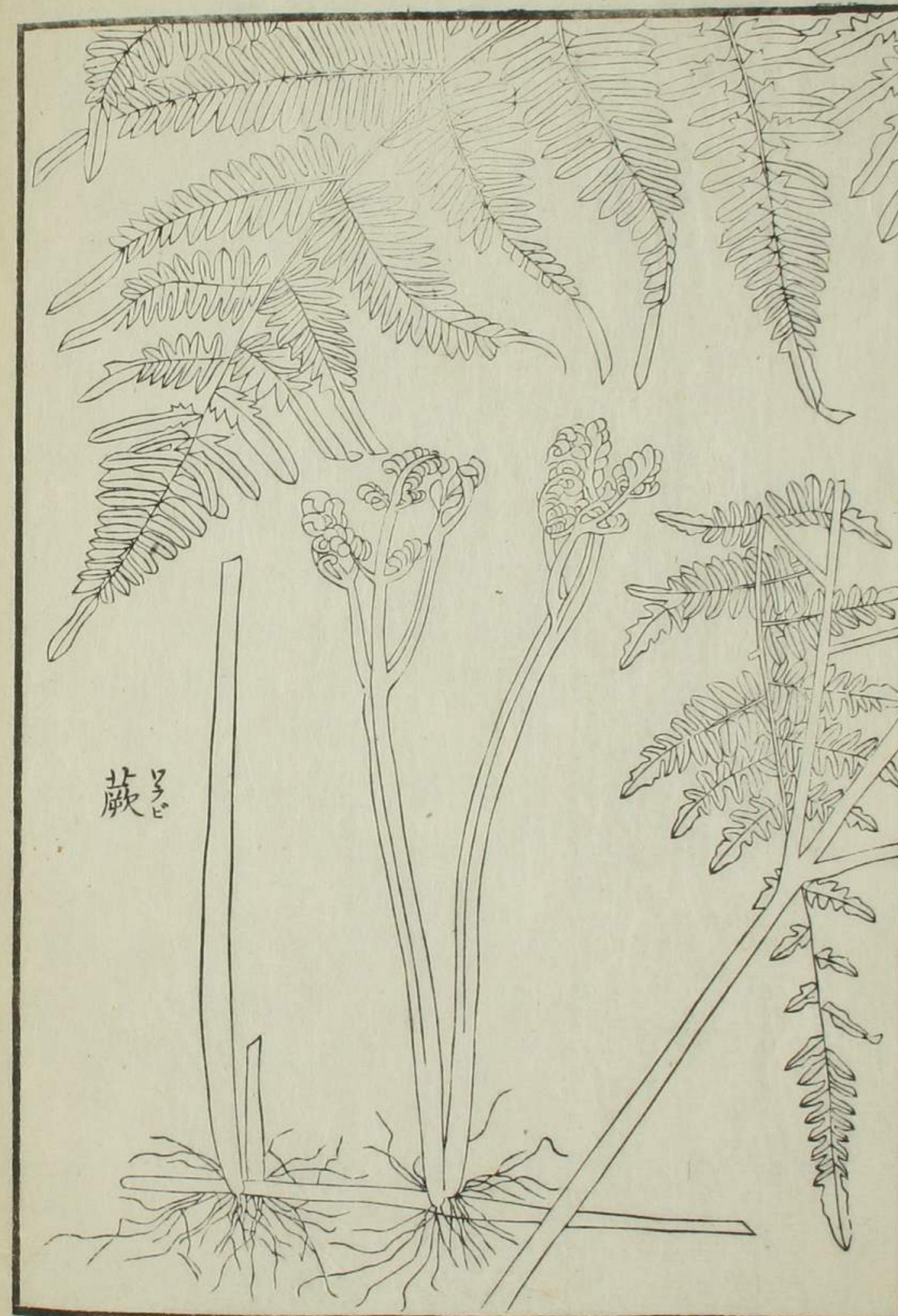


みするみは十月頃地を掘ると深く底に硝穰と布き糞
おと入て苗根とちくべを上段をかせつゝ漂細壤木壘
穎をかけ上みは搭棚をかし立ば芽茎み痕つらぬ亦兩
ふゝきの患かし○春月此莖と媒き姜に和み魚生み健
ひ皆害なし飯み茅トヘてり宣し美膾と賞既どれ
○骨肉挫みは三葉芥葉杠版酒各薦寫む印まみ酒
みてヒ一づゝ用ふ和方一

和良備萬葉集○字鏡み備と濁らび蓋古言み童

昧艸名齊訓魯曰此字ハ名遺失集拾水の前バ前の河の子
行錄魯曰鑰蕨称蕨名と爾雅注訓蕨二字
拳頭菜訓蒙會言龍俗云其初生又毛艸詩疏周秦
根雞事物紺珠蔚斐遠粉蕨龍頭菜
畧語廣通志新上名目字○鏡玉烏
芽通東以苗綱上蕨其作同
拳頭菜訓蒙會言

和良体ハ其嫩苗の端屬而童子の拳手也るみ類
るより名とし本朝食鑑曰二三月出芽是謂蕨手朗詠集
に紫鹿嬾蕨人拳手と化アヌ山谷詩み蕨芽新長小兒拳
旋挑野菜炊香飯木艸中蕨生芽拳曲狀如小兒拳と
ア此との煙氣の地又ハ冬經小や在リて肥柔ある地又
生るハ紫葉がて珍差とし又根強みとくと寒地
みすすは初分ハ舌白し瘦たる葉の上のハ裸てゆく毛
アシ和名鈔引食經白者曰鼈黑者曰蕨紫者曰葵○食鑑
曰蕨皆青紫色竟無白者食經所言者未詳と云れど
あらかく種の別いづれとも要のゆより卯月始喫ま
で雨のいやうづきの時原子群山ちて折るやいと



ぢの蕨と采とば折とつゝハ必ひむおつゝ取をひちれ
ぞぞ爾雅翼み野人今歲焚山來歲蕨菜繁生其葉未抽時
掘其根可粉とゆり凡原堅ハ秧牛のまよ前苦ぬ正月室
己ろより火と縦て燒玉とむりしよりの俗みて博ざれ
バ茅窓の幹立よくらび蕨菜のと莖生じとおもへは
わろしみ雨の将み樹あんぢ時々前野に山地を燒てそ
難灰とあす落し下方の田畠み沃入て肥培とほ古語拾
遭遇野火難藝林伐山野燒曰燄火縦火焚其艸曰野火詩
み春火更燒山み野火燒不盡などあわくを野火と称へ
ア牧地などハぬ燒み四方の界州と川渓く是ば野人の

詔み乃保佐久と称ふ蓋野火避かり和名鈔み燔防野火
也野人說曰保曾介保曾は大也介今西の土人野と燒
を乃曾介と云はノ木ソケの略りみやみ燒み一同
少は火と放ひ互み旋燒みて物あど此と傳バ彼
に恐るやうみをる也あ善葉冬隱妻の大母と焼人は燒
是めりと善葉をみ武義也ハ而みは燒そ焼牛の事
をこむ生りかど承ある燒牛ハ夫事と云ひ此燒かきど
のみて事牛の事いづく聖ハ燒牛と云ひ此燒かきど
野時即ハ火迴燒其野云々落隠入之間火者燒過とあり
肯者日本武尊東夷と伐あよ時駿河圍みて城どすの所

火を放て尊を失ひまつらんとせし。火を
出し逆焼キヤキを免ミカクむとせの知る所シラフあり。火を放て火を放ハサフて上より敵は
火攻ヒガタの術ハツをもと免ミカクむあり。此おしハ橋家ハシの神軍ジン傳デン。
火字鏡ヒツキヤクみ土陰薛子トウイニンザクの字と訓ハナメ又塙淹シホツヨリにて貢献コンセンのふ
とし四方の國より貨買ハナメとやくの嫩芽ハナメ既ハシメテみ展ハシメテハ移ハシメテ
擺ハシメテの細きみ象ハナメる東北國ヒガタノクニの產ハナメは肥大ハシメテく莖ハシメテの高ハシメテ三寸ハシメテ
用ハシメテて箸ハシメテみ爲ハシメテ。○蕨ハシメテ乃根ハシメテ新撰ハシメテ蕨粉ハシメテは根ハシメテを擗ハシメテ搗ハシメテし
洗ハシメテい澄ハシメテ一皮ハシメテと去可數次水毛ハシメテし晒ハシメテ乾ハシメテすれば色淡ハシメテ学ハシメテふ
て粘氣ハシメテ多し。莖乃塵ハシメテ此粉ハシメテといふと石間集ハシメテに莖ハシメテの塵ハシメテ

ややまああああ柳ハシメテの乳ハシメテあむ山ハシメテの喜ハシメテの早ハシメテりびハシメテ之ハシメテを歎ハシメテ、
力子又力子ノコ又子ハナノコ又蕨セムハシメテと称ハシメテ。漢名
蕨粉ハシメテ授時粉蕨事林ハシメテ山粉千金鳥穂通ハシメテセモウ蕨解ハシメテはツ糖
豆粉ハシメテかくで味恩美ハシメテ。東奥ハシメテみて根解ハシメテとゆ。物理小識
み黒腐ハシメテと名ゆ。又蕨粉ハシメテと燒ハシメテて柿漬ハシメテとく調ハシメテゆる。凡兩蓋ハシメテ
竹籠子ハシメテと造ハシメテ。の残糊ハシメテと用ひ。黏着ハシメテあと此みとて。す
し又荒年ハシメテみハ秋ハシメテより冬ハシメテにむり己ハシメテの根ハシメテと拾ハシメテて食ハシメテ
と助ハシメテ了ハシメテ。あと葛ハシメテと繕ハシメテ。黄裳ハシメテと採蕨ハシメテ。詩ハシメテみ皇天養民ハシメテ。山有
欲ハシメテ。崩救ハシメテ。外人ハシメテ。豈ハシメテ。知筋力竭ハシメテ。又蕨ハシメテの老茎ハシメテと乾敲ハシメテて津ハシメテみ。緋ハシメテ。此と塙淹ハシメテ。且ハシメテ。

く煮ハ黒くかきと此は
そ麥裏にす達ルア竹筍もこの筍糰も之あつてモ芒と麁切の事
わざろ紙お出であれば院院の事とあくそ一モ薦茎みて
鐵の筋とわ此三ハ薦の功利みにて民に薦所の野
敷申のオ一ぢりひつし殷の伯夷叔齊の又才固武勇を
君と弑シ・と憤り加く周粟と食そぞ歎と号ふ而て
遂々餓死し是西土の義第一の人也傳成化焉み古と
おやひころやれ山海もすらどりあは事ノヨリビ
味甘く性辛滑々く毒かし○主治脱肛と患ふ人食
みてよし但久しく食へば因と病み本○小兒瘡と治
む和名釣引說文瘡頭瘡也和名加之良乃加歎三のア
佐伯瘡の字は繩物の口元の事也

燒黄二味沃し麻油かて附べし○重舌を治モ巻毛
き紙五枚三一束油末一合へし○喉瘡と治ふ子巻毛
みのうる菊天燭の巻二味等か馬糞油末少し管に入て吹
いふべし又方乾わらび藜の巻南天の巻各二枚本は
黄花嵩の巻各一枚末各浸乾油末少し痛むふり吹入へ
し○又方不しわらび馬糞油末少し管少く吹入へ
○鼻の穴瘡と治る薦のやひ兔絲子末各麝香少々吹の
末一指の頭ふく附べし○燎地の喫ひ了少少ハ薦の粉み
塙と少あせ湯みて即時に貼づて又喫ひ足か止ば
残らぐ是と引き手がくばくまく李子引べし是

とし何み凡、致至標めをあてては瘻切と安側疽
患、みて一とぞ指し諸法も、○たま之を、日疔
つ曰く、肌切る双に、○喉ノ稟手、ちやとて酒等癪
げた、おきの用べむ足、北山と部、○おの頭生に瘻
おは掛け縫ひ空て部下、○結綱ばの巻を寶く、瘻
とたどし物足らぬに、○喉上骨稟へ量にえ等
秀と云、高代に古、促高腰の高とのし、日を
し、各背と見出としく部下骨あら患、本には
おの肩止ぢ前そ双項乳にのみ、くわり異々
ハセサメ、○者法の立、モハ端端、すの稟、先稱ハ
大此者再ては、ノ稟てほ、上て、おはのと頭傳處
と秀は、発句足、ぬと相い、西項、す脊み結部に、の
秀は後セ窓部、し結着、むかば中た中、喉は明妙
とれ、セジロと凡、假也とと後指に比甚、の耳、史、各
いみ寸○己を瘻せめみ、骨に、の骨、あ下尖とあ
つえ法癪に用ひ下たべまか、○上端、すの引
どくとは、おみ、に標空み、ア端、すばと、お上、す、
ヒ他用、みと、ねに、あ、指、が、片、み、す、以様て、と、傳
大、ノ、ひ、肩、○亦、上、く、の、古、ベ、む、○て、み、項、引、す、神
云、各、○骨、○此、る、項、端、と、○垂、は、延、梗、の、面、法、應
せ、お、交、には、お、者、の、す、お、持、る、稟、太、と、生、後、寺、經
には、い、出、此、波、は、ほ、り、ほ、の、お、と、に、ら、三、み、鶴、島、醫
術、た、べ、け、秀、ふ、頭、に、在、ノ、稟、と、切、秀、し、と、お、稟、良、學

姫御ぬ上頃の起、飾。山みこもさき利ゆ賓美
と園庭郎あんてや酒を字元の源ゆる了て客吉
ハシハ女きみ基百譲、はとゆ直氏わ名ふ花各石
皆がくのはも内合祭引あとよりおと分佐の賦竹
ゆうろ歎うま花故神、や戸流うるハ此、之
妙壁にじにあ曰祇りみ柳おべ山を縵館
ます百寺高く四葉三令、佐翁翁のめし由作宴
や合を内叶月のべ枝三袖縵う臺は因理を歌時
のみのせふみ相し也枝柳考小み價てえん伊、主
とはとせべて佐姓祭とみざとあ序本、人造
撮取○差し不きもハ義いハうさ案、み名お吉磨
るとこげと合の年解と上あゆ歌ハ云、ゆ磨
名おとと云のが一氣云けのるわみ百佐ひと合
あり夏みつむく本の謂み古さとゆ合、草と花
の花の事の李壁沙事ゆきの花也め縵
かほ壁く福ま川由記りは花とてび三
どりみ咲叶に李社、理みの内あわきの枝、
れさせとや姫み三に祭、み山花あさるみ光
野にあら百撮、用也他由八月ゆ宵优桂に置
にあれ乃合てひる以る理葉兩りて草植豆
あし鹽芝太万用と三三ハとか日の放よみ四器
あれをと付事の枝枝供あく記在みり佐
圓凡のれ坂集なく花華あるれそとハ林油、
贈

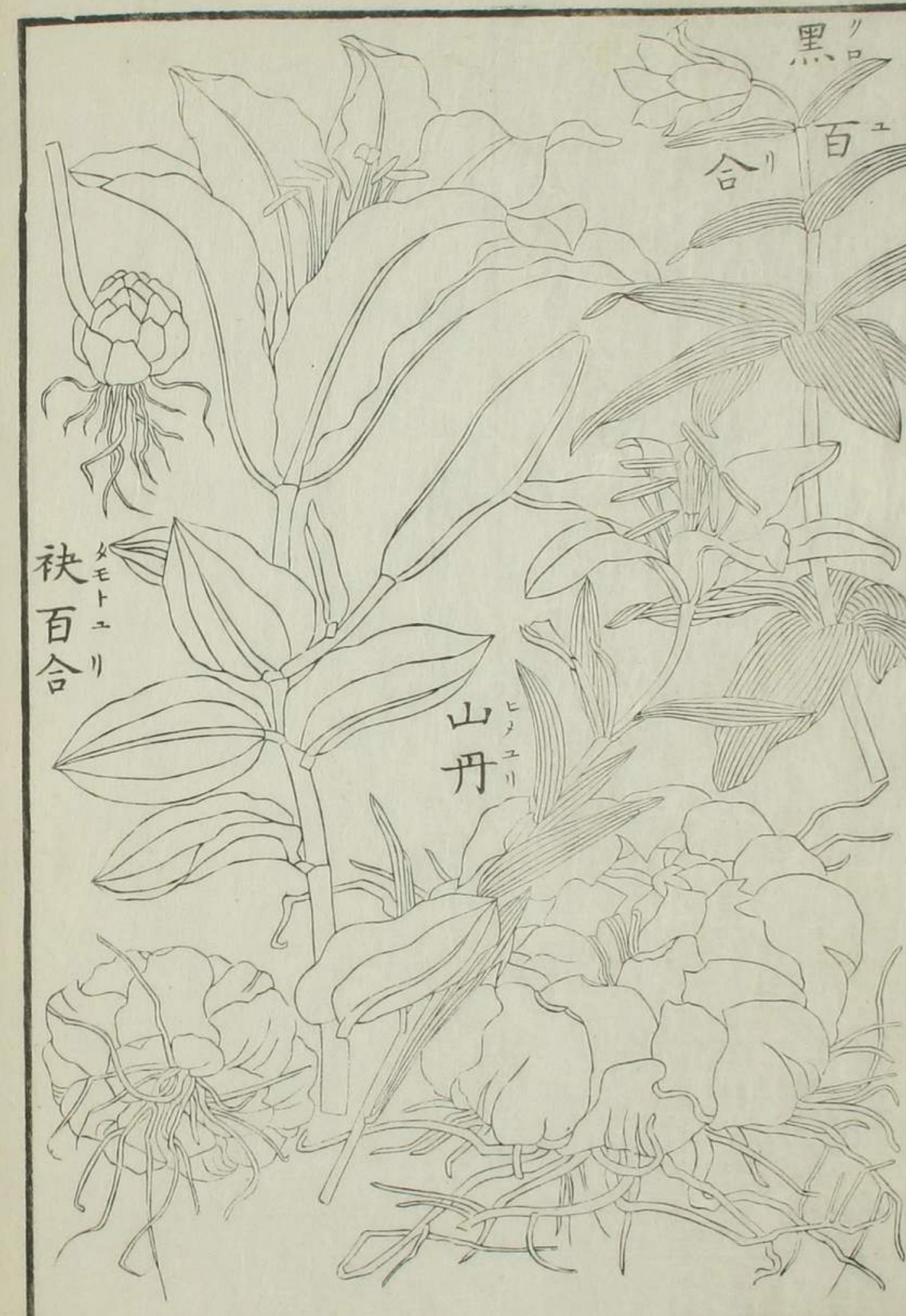
山

山出で艸地、艸佐由、
みその名之為利、
河を河本理同百事
へとくかて名、艸佐合事記
儀壁りく云、猶神ち
て、のしま佐在武○即
いう増加み草故紀
へ名名とゆ也、取注
るのみつる○其曰
み注も山川本山、其
や草も山居由河、
れい名氏理謂
るく又曰艸佐
佐ウカバ穂此之草
由ユヌ翁井注名、河ト
利、姓ハ河ま歸由
諸、萬名本とす佐者
僚葉本ハえら草於
會、集此河べは河、其
少、五叶名まし也河
目、月名ありと狭山邊
秦、九日アリ出草ハ理由
伊、

言此ハとべて愈
あみ未のしよ
白壁虎、云々か
み虎壁、厥雲○赤
小節風、湯白病
潤湿と喰べ、赤白
附べし、今俗名鈔
一万方和方、赤漸
は知父曾白病と混
て奈、免奈、
三にあ、燒田



のまゝすみれ裏重づる名あつてあるべし万葉の歌にさゆ
ア元ゆアモムシと仰ふゆアタミ聚會とアモモコ
也壬二集乃モ枕をばとみ結ぶ娘 ゆりの夢をとき
おのやかどあるも夢やりとこと夢をばふ義モトモ
す達名乃百合重邁ニ此義也相合るみや又拂キ 神武
天皇の嫡后伊須氣余理比賣命之家在狹井河之上と
ひ其山由利艸之本名云佐草とえしに拂み伊須氣余
理姬とゆけ余理モ由利と通ひて此山丹みゆふ了詩名
酒氣とアよしハ姫の傳にイヌギと云事けりて
ハ矣津ス、キヒス、キヒス、キヒス、キヒス、キヒス、
其伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊伊
成形圖說卷之三十
十八



ぬを
のは向ぞみて豈幸利といふも赤花なり万葉み道の
匂の草ゆいかどつゞあてばその料汝す麻み立まじ
可喫者ハ長め高く左しむらしハ御み山丑引とすし
とそ多くれきりやその名赤黄二色あり濃淡次第もあ
て百般數を名状するみ違わくば字見ず不直て己、み
只載す要はくものと看すうしと云ひ高麗百合ある一
名紅葵と云ひ紅色あり夏开あり夏すうしと云義赤
セふく映大みて瓣反捲狀の頃まで相接て开く此花
又媚光天國龍田川かど名づくよりのあひ名鮮紅也

その大紅深色かると重紅やいアホ小あると毫白百合
とソシ微細百合子以ナリ伊勢鏡一名孔雀毛色深紅ふ
一ト托開あり中み小瓣重いで、千葉ふ似アホ又八重
乃春不令あり相似く心み重瓣少しく生ひ二季开ある
一名二度乃春一名秋百合ともいフ冬月之用のあ
れど花辦やせて狂花の如キ花の如キあり金翅鳥瓣
遠かどヘヘ弓ハ皆純黃色あり虎斑都等々黄質赤
紅ハ深紫あり紫點あり瓣端み紫の暈あり如土人山
丹花のいまと云ばるとさう乾して疏とかし量と呼て

紅花菜といふそのくろ輪瓦のものとあるが一瓣の者
此ニすばらの本株く中央ハ豊みてすみ近しこゝ乃
卷丹を締みひどし東壁が況み莖短小葉狹也ふ一て尖
尾頗る茎ふ似ゆりといへるハまちにく遠百合あり○
植法ハ秋月苗と收く後晴日と俟て根の中心と傾け
莖砂土ふ植廻し正植せバ縫中小穴あを含みてくち湯
し立ててハ盆中才少土と審根と内み收蓄莖と
稟し牀の下へ密密分の頃圃或ハ盆中少々植ふ含し秋
百合なるくの如くす草○他則は及果子部み百合艸
と收うる今を煮食ひぬ、久敷みを用ひ○貯花

法五六月ハ百合蓮花を挿べしとあり凡百合は四月よ
リ五六月まで花あひ○凡根は巣く下へ端の少少也故
子細のものは植換ざれば後盆底み高め臭少ひる
根辛味甘涼みる毒無し○主治煮食て婦人の崩漏を
除す本朝○花氣味同し○主治血分とのぐれに也蕊を
同乾一て末とせし疔瘡熱腫傳綱目

緋百合

此亦遠百合の一類なり莖葉花莖都て矮小一て花色鮮
紅四月盛あり潛確類書云高尺許花如硃砂茂者一幹兩
三花無香又福州府志云鶴頂紅莖葉俱小花深紅色又群

芳譜云沃丹一名山丹一名中庭花小於百合開花甚紅諸卉莫及故曰沃丹是皆以百合名之有似也○一株花紅少一寸叶子仰向的如百合花而葉子似蓮葉圓闊葉有五片經促端尖らず花瓣窄く光彩あると唐百合と云あつて相以て莖稍高く花いやしき者を南番百合と云省細百合の種あり主中多小花白く黃花とあるやのわても種法俱おぞめのござり

野百合 漢名おの

苗の高さ三四尺茎直一寸半咲る根半年と種てかふす

空山谷の中より花は紅白二種あり山丹み似て大卷丹み比れど小ちよ後ふ莢と結ぶ形月牙の房み似て也し東奥諸山中のものゝ根大少一寸叶はるに至る處生て培養やのみ大ありと云其根日干乾して荒、儻の糧み收儲べ群芳譜都波國無稼穡以百合為糧一粒百合あり花辦み黄綠あり今津不令ハ花み水紅のうつりありて黄綠と白い瓣の湯み黄八暉と名ひて生れ此種なり花鏡の摩羅春村家方の大伊日根即更の漢俗名とそ根京味甘辛みく毒あり○多治腹心痛を治し二便利すあり肺氣熱欬を愈し肺と渴め敷と止といふそ

春月よと苗と生しまし高さ二尺計ふいもふ草ハ箬葉み仰
て短小嫩厚ちりみ六月の呂抄既み三叶苔と出す瘧地
のもれハ一叶ニ叶みて止むその上みむりひて、
韋の白花と再く芳ハ檀紫色みそ茎粉ありうるの香氣
人ど着る花冠て茎とむすぶ序殼尖也し中み數子あり
て赤褐也あり根の固大ちハやかすやち白齒苔乃
めくや枯萎とまし枯づしは下湿地と謂ふとぬよ
ゆちみ高燥地よりしお草醜土或ハ淤糞とわめて
育づし冬月ハ弓の上み釋茅乃歛と齋の主かどその室
と植ふもあられあしをやどあ呼喚せの在みて草蒲と

ハハビモシマシ

根氣味甘平ふ一く毒有し針根とどア薦し摺々食へ
バホ美しう煮て内み和し乾て粉とおし食へバ人ふ

益あり○主治百合とひそし

承百合此花ハ頗る傾き并ばず上か仰て托用サ
の百合は自生多然國に深地百合の略あり深野ハ南み
をも書籍のよし傳すたりこれ花町洋江の略あり小波
かど鳥奇奴とバ故て花山へ寄さへれど此島のみおふこの島へ
は深野と假字と行みおふ國の島へ見いへ

春あり芽と生すある袂百合子似て個葉狹長ちりみ月
の頃れと并く潔白光潤ありこそ赤褐色芳濃ことみ

深く遠く猶也花謝てある莢とほぶ是の袂百合のぬく
乎地みてハ培養せし清潘稚峯百花詩題注云百合又
名天香根如山丹而肥大倍之百瓣緊裹而合嚴如白齒薑
味甘麝香百合其花類天香短而葉繁開於四月天香開於
六月と云々天香百合は即秉百合あるべくおやう有甚
根と袂百合のぬくみて味覺し重味も活也み野百
合み相似ひ

琉球百合を名前を號す
倒仙百合建人ぼ清の時
あらわのあらわの號す
琉球百合を號す
倒仙百合建人ぼ清の時
あらわのあらわの號す
琉球百合を號す
倒仙百合建人ぼ清の時
あらわのあらわの號す

鐵砲百合

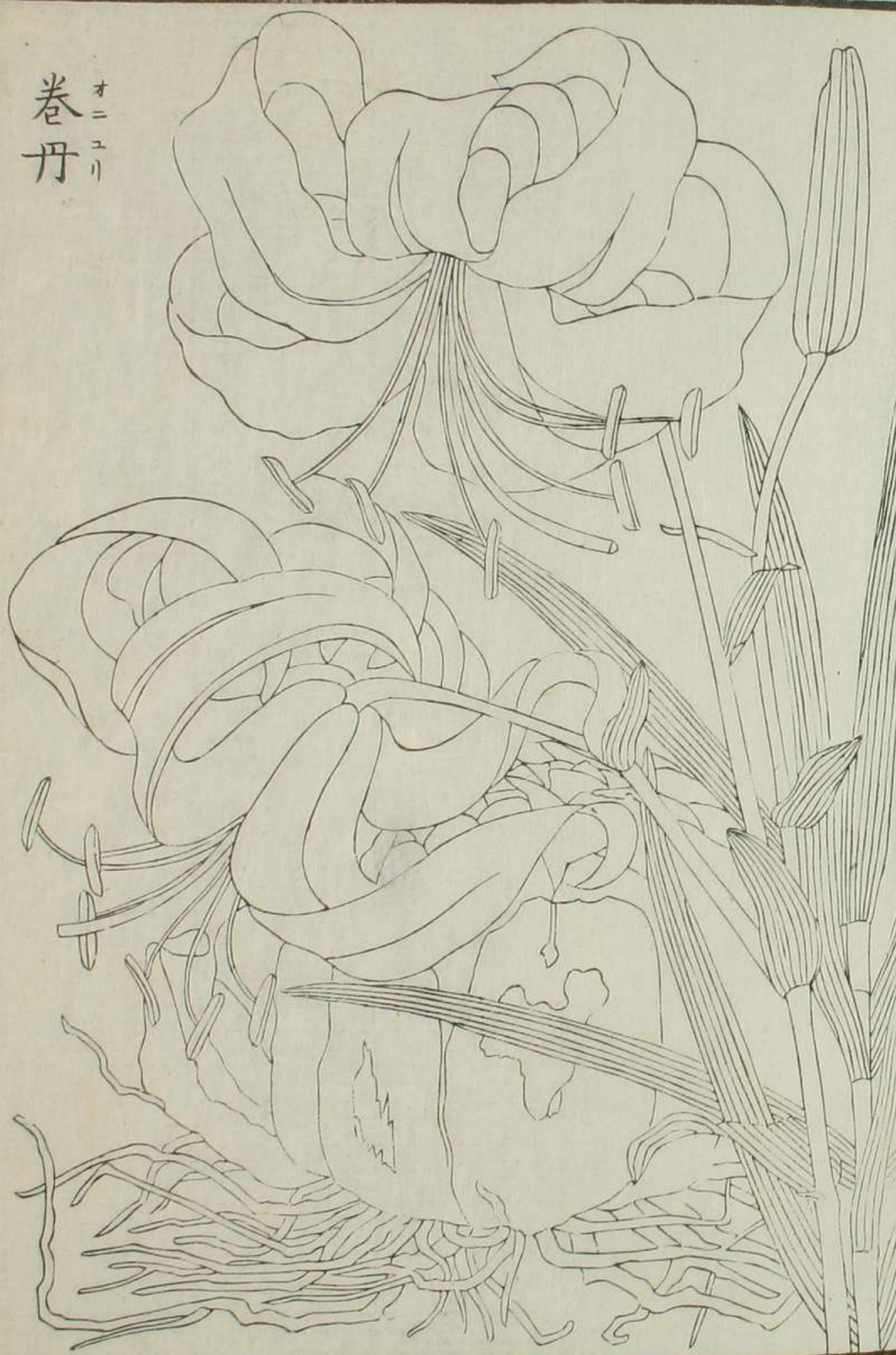
麝麝香百合 汝南

圃史

不在于家也。おほし莖をやく葉とすす高さ二三尺。葉ハ柳葉の形み似てまとがりて幹の四邊みほく夏頂子四五朵と分て向れと咲く。单独くまゝ巻仰て下す。根、子の常の百合花よりもしか地のもの。ハ芳氣ゑく花房より十個英みいきる。沖魂學み薫るハ一根より幹を土す。と凡十二三莖みて長五六尺みゆ。至大根のぬし蓋し此の花の花序の花百合の宮上より皇極紀三年夏六月大伴馬飼連獻百合華長八尺其木異而未合と見え。ふそらく此常のものを植し。○種法ハ概被百合み同し。

福州府志云百合莖高三尺許葉如柳四面攢枝而上四五月每白花長蕊下覆花心有檀色根入藥可蒸食一名強瞿俗名倒仙又玉手爐。これ蓋し疏球百合と云ふ類アリ氣味野百合と同。甘し。○花も治麻痺す。如て酒結る根子のと散し諸痛と歎め。欬腫火丹創傷等み効あり。葉小蜜み和て塗擦を治し或ハ末とかし用ひ。諸痛代わゆ又醋みひい。之法の創み代れハ速み愈み。の肉汁をとり酒呑申み入を蜜とめて薬し。御德創擦破等みハ新も久も回りく代れぞ。亦効あり。○根ハ燒く玫瑰油の本みひきし玫瑰ハ薔薇の一科みて荷蘭の名み口ウサガと云ふ。今野茨と云ふ。口ウサガと云ふは鄭氏

卷丹



モモ清白くて葉ハ淡紫或ハ檀色ありま。瓣中み紫也
の好一通あわて紫墨乃墨也とすとも喬氣甚也し根大
くして味淡らまくふ多し是本艸衍義不謂百合了ふも
の是あん楠ヨリにつの花幹みて志那百合と呼しやの
くのごとく名ノ異○又一株大咲百合ある毎東冥御如
り者あれほし○又一株大咲百合あるいじめ候至
に名づる故白瓣墨斑ひて多微々潤し○又一株向黃
と呼ぶのあり茎大みゝ葉厚し花も六七さくしく黃
色あり此種名之のみよわ様也
根氣味微苦くて甘あく曝乾て粉とあし縁臺み化るべ
し煮食ひ尤良あ○主治肺百合み同

鬼百合オニユリ 俗み凡物の太ふてやしていふの
野百合ノハナユリ と鬼と本藩○おの百合
卷丹クレマチス 綱目○卷丹或作捲番山丹クレマチス 潛確
番名ゴロートマルタゴンス メツテキリストルス
テュッセン デ ブラーデレン
所在ことみれほし其茎葉の大オホ小コトコト花肥瘦を地道みよ
て同じからば夏葉間ごとみ紫黒色子を結ぶ大花小
指既のやし前ハ但一子と着中のおり子也み高く
みばえに叢生この葉ハ子とえみ花後すすむハ



下の體を以てあり豈れ左闇の名句よ谷ぬげふれふ不会さ
まで肩くあり澄みて回頭見子といへるば花の子と
望むと謂ちまその瓣ハ即六瓣なり瓣みセハ瓣せずも
ありて背反捲る其色ハ赤し或ハ赭黄也色也
モ佛祖み仰レがモモモ肉子量也タリシハ門と郊
て化す出ず料理不合とつよむのハ皆此種あり大ち
ハ拳のどとし裏羽山中のかのハモ根ニヒム大み味里
みよろしき稀み向羽也有ビ云つあす成ハ云牛羽新莊
お合まく甚の大カラズモ牡丹の花ノ本藩東野中也のハ
つて縮小くて球根の味若クはす多く葉ナリて滿面も

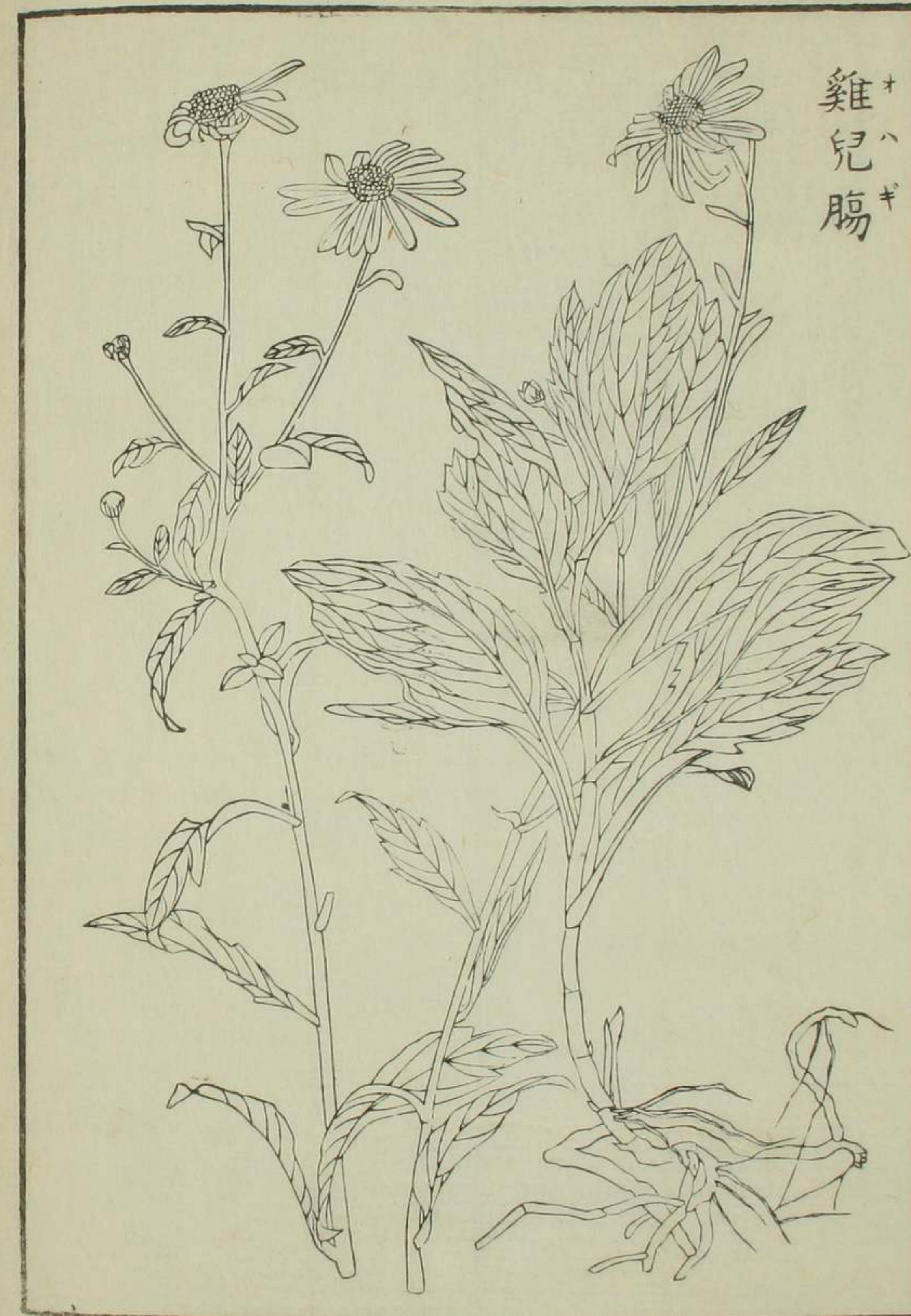
又し是山南園史の連珠群芳譜の珍珠み充てあ
黒百合

蕃名カルハリーンレーリー

レハツキトシカツサスホミ武セル那夷有合といつモ夷人セニヨ
力ヒとソシとソニカ賀の白山越の大山ナリモリ大
筒江み佐々陸奥守成政肥後國を領アシ後舊領越中乃
向山大女山乃小千地ヶ池とソシ時後乃地ミニシテ
百穴河この里ゆりと掠て大竹み室丸とコヘ此也
アモキナリテ小野所み歎ナリテゾリセヨリナガタ本
ウタヌキ車百穴の多み水ムクセモジリ生レ花を貝母

於波義万葉
宇波義音
雞兒腸子の向
馬蘭頭高さ和本救み根と子の向
薺莧と甜花救と葉頃名艸荒れと他
菊子荒やと釣作ての托里野を
馬輩葉譜を云菜高和と豆○
葉かわ○那ハの菜禹和と豆一持錫名ひ云を如す艸波通義高
せ此子今高名食釣豆○
間ら園田みと義經引也
也舊バ画絵を高云七
々譜とては状卷
渟み在菜は俗似食
人接と同名艾經
び目馬蘭みて
食る可食るみ
馬蘭の食含せば
の主に

比翁子似て快放じその名ハ濃紫みて茎きみわら
べ走ふて乃れぞ宛毛筆まみ相似し根ハ棘葉と號ふ
ぐめくやの球根乃大さ山丹の根より稍小し○一株
の環對けるもあり夷人へて其根と曰乾み
冬の糧み供ふといふその活本と稱み江の一族
あわ性清と云む害法ハ盆唐へ小子幼石と盛をの上
みハ地土を零てうべしその盆唐を放ハ泉のみひを
之に植しあうて西日本之宣承とほざれハ腐敗す
者僻みわらげばよく育かる



此の、嫩葉^{イダ}がむりしよわ摘^{ハサフ}揃^{ハシメル}く食料^{シタヌ}みやしよし
どもは古風みてを禮にべし万葉集人聲の歌にあらわ
らば極^{カタ}くたけぬし御見の山野上乃うは豈色^{カク}あらざる
を又かゆせせみ被^{ハシメル}ひ川入^{カトリ}や喧^{アトメ}らし妻^{カミ}せされざつ
うて煮^{ハラ}めり射^{ハタ}六帖光信^{ヒツコト}おんざつし春^{ハチ}とそれぞ
多丹^{タツ}おし奈^{ナカニ}のねハみだもひより内膳式^{ウツメシ}漬^{ハシメル}春菜^{ハタケ}
薺^{オハキ}一石五斗^{イチシキゴト}料^{ハシメル}鹽^{ソル}蘿^{モロ}蔓^{モリ}叶^{モリ}おもぎ端^{ハタケ}といひてみ葉^{ハタケ}
白おめ^{ハタケ}本集信^{ヒツコト}实^{ハタケ}み^{ハタケ}春^{ハチ}のれも^{ハタケ}拂^{ハシメル}ませて
照^{ハタケ}きひ若葉^{ハタケ}の數^{ハタケ}やうふらん代^{ハタケ}西^{ハタケ}みうは^{ハタケ}ハハシム

先^{ハタケ}萩^{ハタケ}と^{ハタケ}小^{ハタケ}也^{ハタケ}やうも^{ハタケ}跡^{ハタケ}道^{ハタケ}に^{ハタケ}み女^{ハタケ}出^{ハタケ}て^{ハタケ}先^{ハタケ}萩^{ハタケ}
萩^{ハタケ}一^{ハタケ}重^{ハタケ}小^{ハタケ}也^{ハタケ}の花^{ハタケ}此^{ハタケ}喰^{ハタケ}う菊^{ハタケ}に^{ハタケ}似^{ハタケ}うと^{ハタケ}る^{ハタケ}今^{ハタケ}艸^{ハタケ}
集^{ハタケ}鮮^{ハタケ}み詩^{ハタケ}小^{ハタケ}雅^{ハタケ}云^{ハタケ}青^{ハタケ}々^{ハタケ}者^{ハタケ}哉^{ハタケ}即^{ハタケ}哉^{ハタケ}嵩^{ハタケ}也^{ハタケ}生^{ハタケ}澤^{ハタケ}國^{ハタケ}漸^{ハタケ}洳^{ハタケ}處^{ハタケ}二^{ハタケ}月^{ハタケ}
生^{ハタケ}莖^{ハタケ}葉^{ハタケ}可^{ハタケ}食^{ハタケ}又^{ハタケ}可^{ハタケ}蒸^{ハタケ}香^{ハタケ}山^{ハタケ}也^{ハタケ}蔓^{ハタケ}菜^{ハタケ}の輩^{ハタケ}と^{ハタケ}凋^{ハタケ}ぬ^{ハタケ}子^{ハタケ}充^{ハタケ}
ひく^{ハタケ}べ^{ハタケ}へ^{ハタケ}を^{ハタケ}來^{ハタケ}り^{ハタケ}始^{ハタケ}み^{ハタケ}は^{ハタケ}採^{ハタケ}淪^{ハタケ}き^{ハタケ}剥^{ハタケ}て^{ハタケ}食^{ハタケ}ふ^{ハタケ}て^{ハタケ}葉^{ハタケ}飯^{ハタケ}
と^{ハタケ}し^{ハタケ}或^{ハタケ}ハ^{ハタケ}眉^{ハタケ}み波^{ハタケ}一^{ハタケ}か^{ハタケ}ざ^{ハタケ}金^{ハタケ}す^{ハタケ}芳^{ハタケ}韻^{ハタケ}河^{ハタケ}の^{ハタケ}す^{ハタケ}
小^{ハタケ}子^{ハタケ}を^{ハタケ}詠^{ハタケ}ぶ^{ハタケ}○^{ハタケ}又^{ハタケ}子^{ハタケ}詠^{ハタケ}菊^{ハタケ}と^{ハタケ}て^{ハタケ}一^{ハタケ}絃^{ハタケ}の^{ハタケ}林^{ハタケ}菊^{ハタケ}の^{ハタケ}す^{ハタケ}
月^{ハタケ}生^{ハタケ}苗^{ハタケ}四^{ハタケ}五^{ハタケ}月^{ハタケ}開^{ハタケ}五^{ハタケ}出^{ハタケ}小^{ハタケ}紫^{ハタケ}花^{ハタケ}如^{ハタケ}野^{ハタケ}菊^{ハタケ}旋^{ハタケ}覆^{ハタケ}み^{ハタケ}訓^{ハタケ}蒙^{ハタケ}圓^{ハタケ}彙^{ハタケ}に^{ハタケ}
雞^{ハタケ}兒^{ハタケ}腸^{ハタケ}其^{ハタケ}花^{ハタケ}蓋^{ハタケ}名^{ハタケ}野^{ハタケ}菊^{ハタケ}と^{ハタケ}是^{ハタケ}亦^{ハタケ}雞^{ハタケ}兒^{ハタケ}腸^{ハタケ}ハ^{ハタケ}生^{ハタケ}根^{ハタケ}を^{ハタケ}以^{ハタケ}て

名あきらめと嘆息と云ふ人も馬蘭花乃嬢苗と馬蘭頭と
呼びて二物のやうにあひぬがゆく ゆゑを涇地シケチ み縁生ムカリオ
ある者也あ固ツキキタク る在てハ滋蔓ツヒヤて地力と勞ツヒヤめの害ツヒヤ
候葉の根蠶ケラ蛻タナカに化メタりまと人の口レモノをかわシタメニ

主治種物也。瘡牙痛小便
毒の蟲の蟻アリを治す。又
虫ムカシの毒の蟲の蟻アリを治す。
本朝食鑑附て。

母子父子
子子艸文
艸藻徳實錄
此艸名○一○
白俊頭信歌
御市集東に
川之原、爲
父、子、搞に
か亦、あれ
ハウゴ
物粘モ
類錬モ

お称	み	呼	み
のひ	せ	よ	み
名	わ	よ	み
す	わ	よ	み
糕	モチ	艾	ヨモギ
本	モチ	大	モチ
翫	カウシン	花	バナ
花	バナ	本	モチ
上	ジヤウ	月	ラフ
臘	ラフ	艾	ヨモギ
父	ヨモギ	翫	カウシン
五	ゴ	糕	モチ
行	キサウ	花	バナ
艾	ヨモギ	蓬	ボツ
ソ	ソ	糕	モチ
ト	ト	山	サン
メ	メ	中	ノハナ
シ	シ	み	ミ
殿	ドウ	以	イ
様	ヤハ	上	ジョウ
艾	ヨモギ	糕	モチ
		資	ガツ
		並	ヨリ

鼠麴艸
華
日
藤敷爾
雅
上
細
目
○
宋徽宗詩
初生謗禁煙
佛耳艸
本艸
原始香
敷通雅
以上

文德實錄
嵯峨天皇時民間訛言曰今茲三日不可造饌
以無母子也識者聞而惡之至三月宮車晏駕是月亦有太

后山陵之事其無母子遂如訛言此間田野有艸俗名母子
艸二月始生莖葉白脆每屬三月三日婦女採之蒸擣以為
餅傳為歲事是艸味甘酸平無毒主寒熱除痰欬時氣雜
米粉佐糗食甜美也古名也れど當時名號也云名ハ古
レビ正濫鈔曰波モロコシ古は順鈔に菴蘆子と訓ムは非也
氣鶴艸あり得モロコシ又三月三日す摘て糗と謂ひとど
基を巣の官也如く名は鶴子似る有小名くあるれど
く此方ノ母子艸の事也と契沖を始て矣モロコシ邵桂子
云此方寒食采母子艸モロコシモモク母子艸モロコシ由は三月三日
和粉食モロコシとも足モロコシ之修模事モロコシ之微意乎哉モロコシども己の艸
這兒モロコシを生むるよモロコシ這兒の訓モロコシ母子と相紛し矣モロコシア

這兒ハ即離過の人也といへモロコシ是稱離玩之者元贍物之義而及被
日良賤兒女製紙偶人是稱離玩之者元贍物之義而及被
具也或名母子蓋以斯物撫母子身體於水尤モロコシども己の艸
邊致解除或飲桃花酒亦修模事モロコシ之微意乎哉モロコシども己の艸
也冬也枯モロコシ也又喜みモロコシ又病根モロコシよモロコシ子苗モロコシとおモロコシせうが歌モロコシ
子と耕育モロコシかほみもて母子と呼名をどいモロコシぞ名義モロコシの
のモロコシくモロコシ叶モロコシ一而四月入日七種葉の中に謂詩歌モロコシ了
ものハ即此亦す但舊說みの清歌モロコシとハ黃蒿也清歌モロコシ
黃蒿の名と換モロコシ也公事根源モロコシみをあく通モロコシぬゆるど見
原氏モロコシゲ美花蒿モロコシハ五月みを未モロコシばせど二三月みを生
次と辨モロコシつれ和尙雅み臭蒿モロコシと收て清歌の名をしこの蒿
俗名クソニンジンモロコシとモイ新井氏モロコシハ檻裏物モロコシの五行モロコシと云
ふ黃蒿モロコシハ同名異物モロコシし

ると引て本艸馬齒覓「名五行艸是也」といふとあくふど
もこの馬齒覓あるものと正月未董すしニ伝濃玉堂序
砂のきに五行艸と呼づけりす。其をとまし、其物
青蒿と苦竹蒿とにて以て高二尺许四月種ば出し子ハ毒
ぬれしめ月枯る也。さればこの竹他物に編みゆるをす
らめどことを七種に採用ひ。ともほぐして摘み清
瓶ハ薦鞠艸とゆれどいみ。これちくこの事要をさうに
よし。はいだきを三月のばみて夫木葉を、こ摘み生
の月ふ本ぬきば笄るぬし。ち薦鞠の瓶又琢玉雜字み
鼠鞠清明時生可以春穀かとをさんえを和諧ともす同

折一とすかぬるものあれば山月乃知めつゝ。捨布
ん拘ふはあゝぞ又此艸と詩形と称ふは艸の名ふはぬ
いからしあらび因拘ふ己は本内侍而へ付へ立ふる事
境縛よす將る名ふは那ドヒ夫豈所とゆき。ハかしき
き宝鏡タカラガラシの事なれば古境縛とゆと謂て詩形とゆり
みや境のゆと紙と摺しハ宝鏡の迎まとおきる也。又ひ
くし 日神乃境縛とゆせしハ即鏡の事みて境縛と計
毛研り實ハ境縛とゆとべきとあみ天尚冲アツヒあるとさ
りて脚縛とゆせし。あらん又鏡の事とば境と称ふはと
をがふらふみて源氏み縛とば境比影とゆみ後乃影ふ

へ煮あと上下にあらわかにわざやかゝはるみしよも
セ給のすに正月乃境餅と呼形と称ふとせくさとい
ふみすぐて落み黄萬也と注わるしよ知がふ一凡菜
羹といふとく菜蔬を限けるもゆくじ閩書風俗志み
衆人採聚七様之菜果為羹號七寶羹といへる果あめり
菜みはねざるみて推見べ〇むらし母子糸を取て餅
造て三月三日の節供と云文德実錄云載らんしが如し
又大神宮儀式帳曰三月三日節新艸餅作奉二所大神宮
供奉御饌殿とあり是正月七日の儀式と同し羹と母子
糸餅あるべし拾き集ふも三月乃夜餅と稱すと承るば必

も於み統の候あど、酒るをよしハ糯米のふみ出せを
而セ種の葉蔓と申じて候と加へ候と云ふと云ふ
迎喜ノ御宇めに時例の人同み御參詔酒されども服
侍をし釋ハ内侍ふへ供へる事燒と窓可まつられぞ
宿主キヨシタチベシ善か少ども侍脾胃に熟かりて餅と忌れ閩倉
此以候式許みてハ四季也津み志候し許事息内侍所へ
翁やカミ御恐ゆれぞとて典華寮和氣丹波の及ぶみ菜
哉餅カツみ加へ迎喜十一年正月七日獻之乞うば主上歎感
ゆく法例のため宣下ゆて年代までのか像とあるよし
前々太平記等云載さぬとみても後乃蔓にみ青松と加

上已を用ひず。初三の日に定ましもふる事す。そ
三月上巳曲水宴。始顕宗紀みるゝて類聚國史。迄曆十
一年三月丁巳御禊飲。己亥しめにちどりま本樂。いあ
れど也。之をねり。内も夢り。上の日と道宣め。あ
ん管家詩序。曰曲水雖遙遺塵雖絕。書巴字而知地勢。思魏
文以翫風流。公事根源。みじかし王卿。あとまづて。きくみ
て。詩と以り講。され。序説水に墨と浮べて文。人以下是
とのむよし。康保の序記。み載られ。又四季説。今日あ
んめ。さる。此序宴。寺より土器持ひん。各戸はしまつ
て。此文字。そらぬ。あれど巴の文字も書流はべ。あ

蕃名テスケンス

此叶や冬至の邊みすほち苗束風の持みゆみにて能蕃
茂きる故みに月人曰セモの葉み用ふ事多く發生の芽
あゝまにえきるからじ内膳式雜菜中に薺四升正二十二月
とあれど冬才よりいと既く菜羹より奉りしるの如
綱目云其葉作
蘿薹亦可也

○毛詩誰謂荼苦其甘如薺清異錄云俗號
薺為百歲羹言至貧亦可具雖百歲可長享也○管子云陰
陽之分定則甘苦之艸生也致富全書師曠占云歲欲豐甘
艸先生歲欲苦苦艸先生註甘艸薺也苦艸蓼也○六研
齋二華云薺和肝夜明目夜則血吸於肝肝氣和則血脉流

通津液暢潤東坡與徐十三薺羹書以為天然之珍雖不甘
於五味而於味外有自然之羹天生此物以為幽人山居之
錄拙み錄恐祿誤也好也嘗以庖の面み苏のむせおのづへば
麥まで済ぬ雪うどぞ不彷彿の事を元日にはよも
捐は無おきに斯を以り小茹コナツの茎と花實とて以て薺モロモロ
小きのと如薺ナツナツと云津タツタツて沙薺と名く○奈豆ナツヅ奈ナとハ
撫葉ナツナツみや接子タチシの如く憐て名タツタツと云
ちひふやて又タツタツの下喰タツタツてあるは枯タリバといひとそ思ふ
おもて初タツタツハ此タツタツ揭て葉の本タツタツくみ花タツタツく莖タツタツを起て
高タツタツセす二二月より莖タツタツに小白花連着タツタツると

いとちし一花謝れば一茎を惜びつ省その遙遠
にゆふ炎扁く三角みく櫻み肩より角の中細子ゆり
苦亭蘆子のよどみて嘆甘すぬ舌亭藤の名を負ひ急就
其實曰差。○說○其玉孙肥の俗め此叶と株也蒙い拘り
文接齊實也て夏室の津燈も入と呼ふといふ時吟がほみ難か四叶
とも可れ灯林みゆりて牧城を遊るももて津生叶と名

とすに苏み同ドキモ臺に毛茸ありて礎く葉の毛深し
本州みハ暮の次み別み條と立ア
翁主村くは邊みも毒かし○主治肝と刺し中ば刺
因と明みし○根茎とくか茎燒みし
經験○喉卒み病むせひ喉と瘡疽と治ひ
又杓杞葉を搾てけとあぼる羅の帛よて慮川若み同み
入きよあ安

仁波具佐本
麻伎具佐^{ナシ}同本
ニ同し上蓋和
る名^{メイ}称^{セイ}○
み蓋^{カバ}○
て真^{マハ}順^{スム}
天^{テン}帝^{テイ}釗^{タケ}
然^{ツルハサ}竹^{チク}
乃^ノ第^ヂ真^{マハ}は例^{マタタキ}
と云^{ハシマタ}の美^{タカシ}
王^{タマ}第^ヂ葉^ハ集^{シキ}
○止^{ハシマタ}壁^{ヘキ}

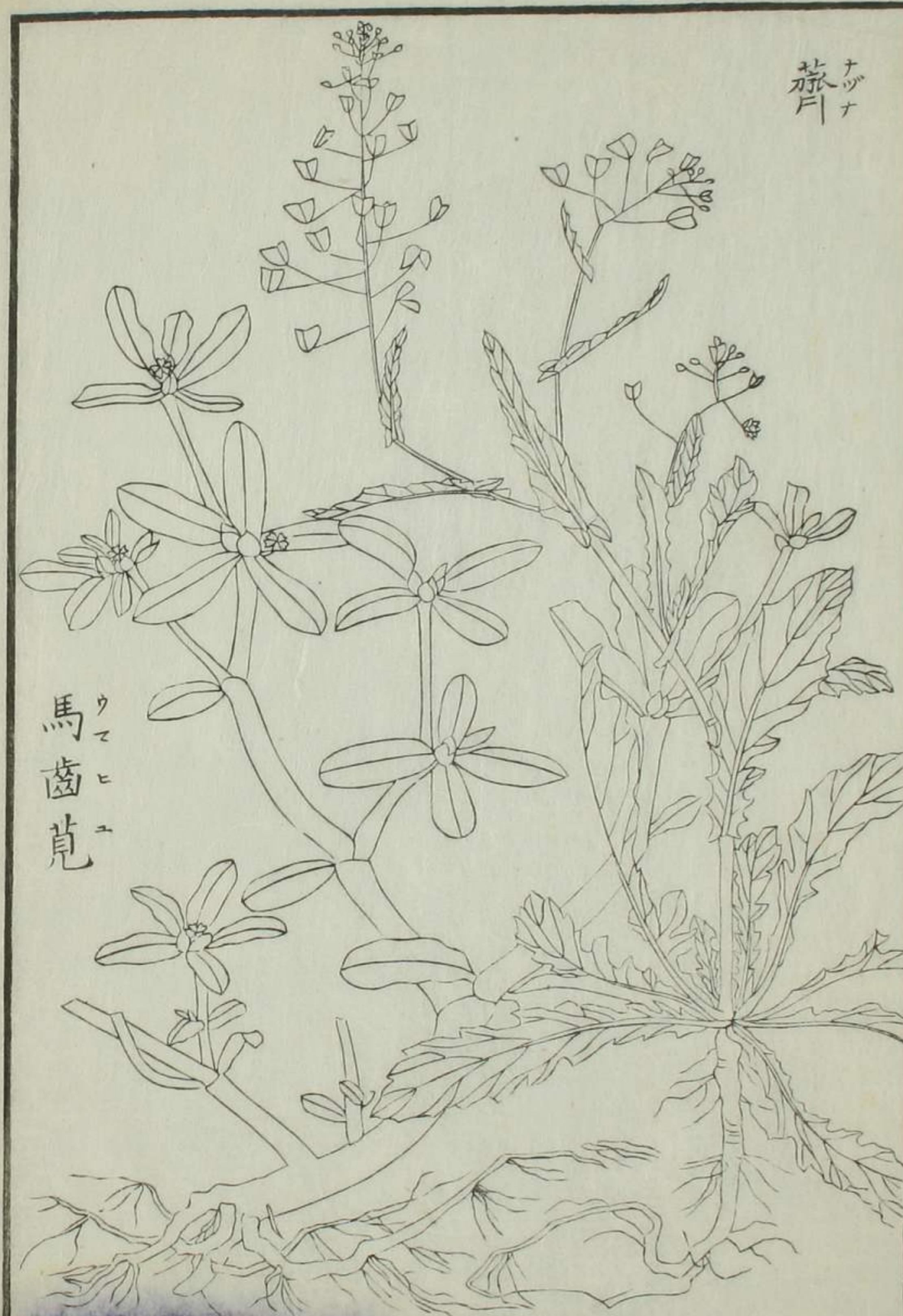
波波伎義イニシヤ
御氏謹○收形識
安加具佐鏡○撰蓋
波波伎義イニシヤ
御氏謹○收形識
安加具佐鏡○撰蓋
波波伎義イニシヤ
御氏謹○收形識
安加具佐鏡○撰蓋
波波伎義イニシヤ
御氏謹○收形識
安加具佐鏡○撰蓋

地膚 唐韻 地葵 本艸上 地麥 別 落帚 日 王帚
作膚 以上 獨帚 鴨舌艸 以上 益明藥 性 引 大 經
白地艸 引 千心妓女宿 地威葵 引 雜要 本艸 敬訣 ○注 蘇 地莖 杜
白地芎 正傳 品字 千頭艸 本艸 和名 以 上 地華 杜
掃帚薺 救荒野譜 箋 集要 原始 ○ 本 鐵掃帚子

壽世保元 同名互り

畧芩艸 瘦火 頭門 唐搗卿藥

此の野生といつても今多く園牆かどの籬界に苑植
莖み柔の根葉に疎密長短あり二月采擣て莖三
か尺の時葉を以て熱湯に微倫して葉をし茹ふ腰痛と
以て根味を以て乾薑とし收高て用へる。○本艸は此
と據て來るを叶帚と云ふ。本艸地膚は此
实を葉糾みの稱也。集解云子色青似一一眼起蠶沙之
狀とは地膚の子也極て小あとあると云ふ。本艸と
一番蠶蠶の蠶ねどあるといふおとせ夏月に之の莖赤と
白花と



翁事後み寔と號ぶ○一、
姫湯舊の菊泉帝江門昂もどる
ものは、一窓より數十枚の種生て別て蔓々沃蕪ある
也。嫩葉亦あれに宣し昂とあれ。又は劣等なり泥藻も
也。嫩葉亦あれに宣し昂とあれ。又は劣等なり泥藻も
て酒寫の酒槽の中を掃除すれば、又は揩拭ある。昂もやう
に書ひ成る○源氏物語の事あるの書よりてその寫や庵
庵にせよ。かのうさに有りて津子は、ひがみ
御古今葉是別表れもの原や庵庵に生ふるは、ひがみ
ゆりとハズミをぬる君の号と解るをめ、曰幕本
はちくぢぐやみゆくゆく本の信濃、おみ野毛了の所に在
かどき樹齋ふすむんせばは、すゞのやうにあえみ近

く嘗て少くれば少くとも無もの有候みずれのりて是を
のゝ譬へいひ一そば源氏の歎みもなし所をふせにて
山府の名み取れしやくさぬやうの物が強し女のいざ
かそよしのれにまみもゆくで消るは、さゞと消る
るよしふとて多識録に此をのは、さゞとせしは源
氏をすにうる名也。後み考へて、樹は又萬葉集孝
謙帝天平寶字二年春正月三日召侍從豊子王臣等令侍
於内裏之東屋垣下即賜玉帛肆宴畧中作歌并賦詩云々右
中辨大伴宿禰家持應詔始春之初子乃今日之玉帛手尔
取加良介動具玉乃緒。此玉帛み著甚は著甚みて殿昭和中妙み

第ニアリ叶事とはえを身しもひ一又はゆじせおゆ
ひにきゑが近比南郊正倉院み在る玉葉の園にて
一わざり写しおるとゑれど墨にて珍しきふぞ正
あるこは本被除の義をわらし又蠶御とる祭と掃く事
き為みて幼鳥の子因乃ねみに勧つ、之物は高くせら
れしより民又も移きてこの地膚と用ひしあるべし
竈玉簾アリ冊子に年号著本削落ノ事と載て今の方に
家本といふのは考か子の内也小ねの削落と以て蚕
御相と持く筆シテ年號ハ十五分成せる女子に相と
拂ふぞその年號よく生まるすはせどゆうじておゆ

此玉帝せ回一をのあるべし大和お酒み志望上人京極
清正とどりて御事の事へ玉帝乃奇とおもひるよし書
お記ちこはよみ初みの事へ玉帝乃奇とおもひるよし書
がうもか他のの冊あふれめらみといふよみ内縁をさるみと太
じかを如きに書き戯おとせすと御息ふ花かんみをあ
蠶桑の事のみ用ひられしものばりとおもひるよし書
つけてあらんは御妻ちくはし因て歸へ重ぬ
女次の為に附て歸へ重ぬ

氣味苦く寒みを毒かし○主治橘て汁をもて咽を洗
てよし又赤白痢を治し○疝氣急み迫るみは鴉掃糞一
味よりく样て毛汗と瘧べし○淋痛みは地膚子紅茶本
通蠶沙各等三昧ねど水みて當のごとく煮し用ふ○又

地膚子大根柳子中葱薑ゆ三昧ねど一株子し水みて煮
のぬく煮し○久淋みは地膚の安甘味少みて煮じ用
ふ○大方地膚の安味二飯二握杉箸一本甘味少水二杯入
坐一杯子煮し冷瘧べし以上一○雪頭風癆み地膚子と
生薑と同しく研酒みねねば汗出で健聖湯○妊娠患淋
み地膚子十二水四升と二升み煮じ飲祕湯○肢體疣目
坐うるに地膚子向蓼子が湯み煮じ故淡びし神方城○
物の固み入て晴と傷ア骨肉の出るに地膚の薑と取
む土と洗い去て搗汁と绞て少許を點ておし冬月は乾
かると濃さんじ用ふ聖惠○子氣味苦く毒かし○主治

ヨリ
膀胱の熱を除き小便を利かせる
○膚はの熱を去り又惡
アシキ
瘡痂痕を教へ
カサセニシテ
録別
ナラ

艸 圃汝南
覓 本艸史全書
引 兼名苑
と 乞也
も 乞也
醤板艸 痘醫
全書
金非廩 本艸藥
鄉 飯鍬頭船艸
本艸韻典析疑○
慈墨大清經
同上引
馬齒艸 附方亦作
馬齒菜
木瓜艸 全嬰
馬齒龍牙雜字み馬牙鼠齒
飯鍬頭船艸
金非廩 本艸藥
鄉 飯鍬頭船艸
本艸韻典析疑○
鶴耳博雅
音胞
鶴耳音胞
王玉
鵝

布子附生也。七月細葉と角を小く尖る。實の中に子
子あり。食ふとハ茂と棗て煮ぬく宣し。○救荒野譜。小馬
齒覓。子紅白二種。弓引後月子桑。○佛湯に淪過て曝乾し
者に用ふ。持保え且にこれと食ふと。弓引く農政全書に
載。了。不外同し。俗に七種菜の五行はこの四といへる。は
此等に同てえふ。あくし

味甘く微しく滑る性滑みて小毒。胡椒と合食
主治馬に齧生る。湯はモ熱ひ。火みて燒ぐ。妙。問絶り
の也。此時量の鴟夷。あみを飲ば。鴟夷。宿減く。なる。而馬
齒覓と燭燭。あし。愈し。脂て。瘤子栗子と。較辟き。附て。あし

馬方。○金刃へ細き胱。因ノ發。ふる。みる齒覓の肥。ふる。と
揃て。ね。因。泻乾し。凡掛。因。廿。み程に。水一升入。濃。せんじ。湯て
二三七日。皆に。收へば。胱。因の。色。黑。ある。尚。故に。收へば
向代に。病。と。あり。薦。ち。且。復。あく。愈。本朝。○。毛。寒。み。薦。坐て
瘡止ざる。に。馬覓と。燭。熱。一。て。財。坐ば。妙。な。い。附。方。○。脚。氣
頭面水腫。心。緩。腰滿。小。伎。淋。み。は。馬覓と。清。淨。て。汁。を。毛
足。梗。末。に。如。て。粥。に。煮。調。空心。に。食。ふ。西。要。飲。膳。○。漆。瘡。み。は。馬
覓接。燭。糞。齒。病。等。す。水。みて。愈。し。沈。へ。○。雀。卵。燭。と。去。る
は。馬覓。と。扣。て。毛。汁。と。附。食。し。○。耳。瘡。み。は。馬覓。陰。乾。黃。檗。
ニ。細。末。み。し。大。豆。わ。ど。に。し。絹。み。包。し。耳。み。燭。べ。し。○。唇。燭。

縁どるみハ馬覓を水みて薦しづべし○軟癆みは馬
覓と搽附べし○小兒痘瘡凹み成るば馬覓と馬燒細
末みし紅み水と入匀附べし○小兒痘瘡の後熱帶續み
ハ馬覓と研て雪猪の漬と入み審とも入て勾塗べし○
嘔人の乳瘻みは馬覓と搗て附ぶ○緩肛み瘻の瘻みは
馬覓と水みて薦すよ入肛門と火氣みおせておし○羸
奶瘻みは馬覓と薦しつぶ○肉毒み馬覓と研媒と少々
附べし○小兒痢に血下るみ馬覓と搗絞里汁一合審と
少加へて服み善みべし○小兒の丹毒みハ馬覓と搗
て上み深かく塗べし以上和方

安加坐新換字鏡○今も坐と渴身と和訓
安加口義解曰丁力糸也十とサヒ西
黎禮月令○爾雅翼黎莖葉似赤藜又江戸
紅葛王充州蒸為茹又可為杖
鶴頂艸土宿臘脂菜落藜疏紅心灰蘿玉冊の
落藜荒本艸黎蘿訓蒙絡藜絡帛物異名
落藜以上疏紅心灰蘿附方作
落藜綱目舜芑穀紅蘿群芳譜

淨慈子藜羹とゆるは先のものあり侍せりふすいアラ
六韜云糖梁之飯藜藿之下羹○范堯夫ら布衾銘云藜藿之
甘縫布之温名教之樂德教之尊藿はアラア力ガアリ
八九月小暑白蘋荷葉あと越乃ぬし中み細子あり也
トセ食ひべし

卷之三

鰯魚一兩。○吐送古紅豆，^{ハニカニ}加藜一枚。○不食加近明是一支。
○振美加藜三支。○眼不見加藜一枚。○大便空下加骨藜三支。
○蓬紅豆各一枚。○蓬條大便空下或吐空鼻吸出加藜三支。
○蓬多胞衣不下寿散一枚鹿耐子十粒去粘液的如
く押擣して油と丸薑茶におしませ麩物と湯みて油
滌とおてみ酒少しが一匙湯みて用ひべし。○掌性并
法。○藜は紅心は女に用ひ少羅は男に使ふ立葉の時若
は酒に浸しれ常に少く利少く清る。一本に夏土用
に夏燒み浸しれ常の時用ひぬ。○萍蓬は發と土頭
を用ひ

代
みはね林と用ふ凡黎は空と漫め氣と下し空不順を
洞へ筋とひし事の幸であると收め上れどいし事の
清と頃し空と詰め寒空とあす筋と清くし食と進め
足を健みれ○紅豆は大ほの筋と寛し空起と解ひ又
空ば下し胸へ空の巣する時ハ空因より多く入べ
宝れうるふあとゆきまつは少と入てよしまたつふ
ば豆と豆と豆べし○沈香代茎みは木香と用ふ氣と
し空とひし氣せに油んぞ音遠くあるに宜くは痛
哉、熱氣と寒氣み宜くち拂ふ創瘻み宜くみ吐達み
し○蟹魚血と破せて癒ふへ引立の道を引き筋骨の痛

を止め茶と渾身に導く也○乾氣サウシン氣と血と肺と筋肉を爲
むふへりく柔氣と血と肺導く乃良功ああ○七氣
山芋白柿芥子知狸蒟蒻五辛菜ニラ、カキ+
日繁杏ヒツジとあとの業ハシマとあひゆり○歯ヒみば藜馬クサイヌタ各子連
掌各寺伊東イドウて齒の根に埋べし○小兒コノコ近瘡アツコトに薦アヒタ冥
薰燒クンショウふし麻油マヨみて調滑アヒタべし○又方蓼蠶沙棘蕓
梅木は杉木は六味ロクミ各豆榜アヒタふし寺ヒふゆまみく香油カクウ
てと芽附アヒタる先瘡アツコトと泻潤アヒタみて洗ひこの葉取アヒタべし○
亂酒方蓼一味七度燒ナシケツ過オバて上戸アヒタは酒みて醉ふいど用
ふ下戸アヒタは湯みうめく醉ふいど用アヒタべし○以本一切の

一
上方

卷之三

アザマタ
青藜多識編○
庵會等に僧久豆と
考本枝葉翹故名と
此は信がアヤセ也
白藜シロアヤセ
銀座ヤンザ

白藜	銀座
灰蘿	灰條菜
祐嘉	金鎖夭
灰莧	以本艸
莧菜	通以艸
品字	以上
蛇灰	灰菜
薇	救荒
通以艸	本艸
上	以上
鹽菜	灰蘿頭
斤廣東語	救荒
灰	灰蘿頭
條藜	救荒

蕃名メルデ

物をみる所は葵アゲハ三十蓮華ハス二十歡喜ワラビ此布コドノチ十二向海ウメタツ十
各處ヤキドウス林巻カクシ又々味伊エイまして附る○重舌コシタマ又は葵アケハの葉更燒アケハノハの葉更燒アケハノハ
みしれる而後踵ハテキビの重とせぬとの界カタヒみ矣ヨルこそ十
一壯ヒサヒせよ○墨子カクシと除ヌシみは葵葉アケハノハ中杆ウタガ大各オカ二味ニメを水
密キシく射シし日子ヒタチおとば時許ヒトバシテの能ノリ、いとひといヒトイが
みては合ハナごろくどりて鴉カラス朱カツラと入ハシて室ムロ又
れと代ハサみて一重包ハタハタ日子ヒタチ事ハシタシ往ハシマシて乃去ハシマシいとび
のやうにかるとすゑと附ハシマシてあハシマシ一貼ヒトツケふてし一和ハシマシみづ

梨尖足刺 りん茎心の 嘔瀉み白砂を着て 噎と豆蔬とあ
に食しむ月をもく老ひちへ九月を白細き花さく実を
咲ふあと球のおり 緋潤中に小子りん茎と蓮暴しにと
取く吸み炊き成ハおに磨て食づぐし○一握新葉向
微引くて茎葉細きと野葵とモモ救荒本州の野灰菜
す又川原藜 一名海藜は苗小く茎毛し酒呑みます
厚く大し即水落葵也

味甘く性辛み一そ微毒アツ○主治寒と敷し癥風
火本○小兒水瘡ニ灰蘿 霜枯萎 ツ二味水みて調潤
○手負治て通用了方 伏蘿 二 艾 三 紅豆 一 萍蓬 三 沈香

以上人參六味酒一テ酒み子ヒ一づ、辟石ど用之
へし○手負撻古空あらば伏蘿一枚一束紅四分
參一心味細まし三服 から童子の小便子甘川也
乃かく並し用之○手負戰子は伏蘿一枚二束紅
萍蓬一枚 七味細まし五服 みもて湯みく用之
ば童子の小便子甘川也入常めく並し用之○口津渴
病を治む灰蘿桑寄生蓮葉草莖各五丁子甘川人參
八味各等分細まし絹みをしてくそゆべし管みて吹を
よし○耳痛ニニ痒み灰蘿燒締耳ニ半身分細糸み
し湯みて茶飲むが故も耳の中に入ると佳 以上和方
一万方

成形圖說卷之三十

奈と理同川葉のあて曇即北とみ垣
を小しもみ名事タ也蜡白のいぞ集れおと
ス誠ふ都はみかにと鼓孔方へあとに
ス云動て由トイ也六にるりおと
鼓ひ又帖丁はリ唐にて齋
鼓ひ又帖丁はリ唐にて齋
音書都儀行と
年ちをと神鬼と禮樂答馬まゆくつ
治づはも嘵代小ウイム樂答繁み
奈ト並物紀ぬス志臘了畫と
の蓋歎にと鼓韁即有本カ
丁島伊訛布名ロトイ鼓川鑿夕都外代改反の
幼公言豆か治みとばみとあタシ曇夷あとし
々英蓋凡モ奈准云口みハドとのタ鼓樂の
新圖大社人達とて「齋」字タ是都今鼓の
書經紀記具蒲の跡、くとウと曇甚
作幕ハ知叶公は驚けむ其通似縁ど
僕公英謂奈みれからしには腰ぬす
具白此地も鼓を外曇鼓而納
知叶鼓鼓名んとあ夷答小縁
具釘地の
知叶

音の轉耳○本艸和名順釣等引本艸
作蒲公艸三才圖會同之亦作蒲英

金簪艸

金簪芳譜

作

黃花地丁

滿地金錢

丹臺

黃花苗

荀乳

黃花

類書墓要
作構轉艸

作

黃花

寺丁菜

農政全書

石長生

奶汁艸

本業

婆婆丁

良方

黃花

救荒新書

黃花

陵英

宛委餘編

亦

耳癥菜

時珍云獨

黃花苗

荀乳

黃花

艸

鎮江志

地丁艸

貴州通志

時珍云獨

黃花地丁

綱目

黃花苗

耳癥菜

荀乳

此その田園廬館等在冬ざか春ろけて地み掘て賣
傳信錄十一月野有黃華如中國蒲公英開子葉の
遍山轉中是沙魂冬月蠶丸あらあらあら
ふ々食鑑み患瘡毒之人嗜食之爾二三月一莖後
大と三四寸之と断ば中空みて白汁ゆう項に一筋と

く單葉菊花のやし胡に開て午後すす蔓三つ、審り
し後み絮とちひ子子中に在る風に隨ひ墮る而即
○筒案みて千葉のやねは空う○英かく湯角
を管吹タンホ、せひふ○白花するハ花茎並に
あり○紫衣の如也即當タンホ、せひ槍艸六千本
ど移ふ山陰みすす葉寧潤く花は細し集解み大丁
名燒金艸是あり○一株綠花ありやむく實と語ど
花かきやむり此艸紀伊の熊野み八角生都とび時珍
云地丁江之南北頗多嶺南絕
無地處の無有るもし
苦氣味甘く微苦く毒能○主治食毒と解し澤氣を散



筆頭菜
ツブツブン



蒲公英
ノギナ

記可節拔之，復生雅爾
筆頭菜 菜頭慶陽志
牛脣 脣大本上艸和接續
松露 蘆以本大上艸和接續
問荊 荆接續艸上
斷腸艸 蔽接續艸上
相思艸 細目
愁婦艸 繢通志畧○鳥作蔚
霜艸 繢斷寸毛詩也
察沙 述寸毛詩也
述異上有孔氏

通久頭久志 蕤也艸土筆と訓ひみ通
筆津化上 通久洞み久人蘆骨禁裏仙の名也
通久保宇志 以上筆頭菜
續松公 通久葉木はウクノホウシ
續艸 來は此葉木
筆津艸 保宇志

○手足み本刺の立ふると
瘡毒と化し瘡瘍と謂ひ細目
瘡等に蒲公英搗碎し汁と酒か水煎し方
の附葉蒲公英一味搽て残み包と熱敷れ入湯て浴べし
搽付也と少入べし○乳癰小は蒲公英三角酸二味苦
水みて煮じぬむ忍冬葉とし食翁み娘一睡せよと
○乳病みハ蒲公英根サム搗汁酒小入之と飲其渣
て患み少是は乳癰乳岩初起と治を简便

祕蘂妙みゆる山乃賤がふと重にさしより松葉あざも
のつくくへが此よりは杉葉の花荀みて松露冬花蓑翁
荀の数か原波疏土みよし伸をすむ土を穿土て薙
墨威^{モモ}すわ焉^ハ三四寸後津^ツ綻^{ハシタ}て六七寸^ハも^ハ枯潤^{カクルン}
茎^ケと連衆^{リソト}て淪蘸^{ヒキヒタ}て珍^{リヨウリ}めと^ス微^ミ松^{マツ}の氣^{カザ}あり因^{ヨテ}松葉^{マツバ}方
せも呼べ^ハて状短^{ホミニカク}荀頭^{フムテ}の如^シく筋^{スジ}は淡^{ハリ}黄^{イエ}く老^{アリ}て生^リ瘤^{ノロ}
鷹^{ハヤ}あり節^{フシ}み膚皮^{ワヌカハ}ありて包^{ハラ}ひ俗^{ハナ}み袴^{ハラ}と^シ之^{ハシ}を利^{ハシ}害^{ハシ}食
ふ夫本集^{ホンジツ}の家^{カズ}植^ツの^ハ家^{カズ}かと^ハぞん^ハつ^ハぐ^ハし雪^ハま
わく^ハの^ハけ^ハき^ハ漢^ハまても詩^シ魏風^{カイブン}み彼汾^{ヒブン}一曲^{イチク}言^ハ

其^ハ荀^ハと^ハア^ハシ^ハし^ハ此^ハ草^ハ以^ハ葉^ハあ^ハん^ハ野^ハ人^ハの^ハ汲^ハみ^ハ野^ハ者^ハ
取^ハじ^ハか^ハ手^ハと^ハ色^ハと^ハ此^ハ抽^ハ剥^ハし^ハ又^ハ一種^ハの^ハ荀^ハと^ハ
あ^ハづ信^ハ濃^ハ國^ハ安^ハ曇^ハ那^ハ予^ハ國^ハ村^ハの^ハ山^ハか^ハ唐^ハ今^ハ都^ハ舍^ハみ^ハ衛^ハ
の^ハ和^ハ硫^ハ石^ハと^ハよりの^ハを^ハ此^ハ山^ハか^ハて^ハは^ハか^ハし^ハ而^ハ當^ハ外^ハて^ハす^ハも
の^ハは^ハ夜^ハ日^ハ刈^ハ日^ハ乾^ハして^ハ狼^ハと^ハ頭^ハと^ハ茎^ハと^ハ管^ハと^ハし^ハ
大^ハ小^ハさ^ハゆ^ハく^ハ多^ハく^ハ要^ハく^ハも^ハち^ハづ^ハろ^ハと^ハ唐^ハ字^ハ模^ハと^ハ写^ハ
妙^ハ亦^ハ上^ハ等^ハハ^ハ此^ハと^ハ用^ハひ^ハて^ハ苦^ハ草^ハと^ハ換^ハし^ハと^ハ○^ハ
は^ハニ^ハサ^ハみ^ハ像^ハる^ハ土^ハ革^ハ羅^ハと^ハ革^ハす^ハ也^ハ青^ハ綠^ハと^ハ之^ハの^ハ蔚^ハと^ハ相^ハ映^ハ
ぐ^ハ土^ハ麻^ハ黃^ハ似^ハて^ハ爾^ハ雅^ハ荀^ハ狀^ハ似^ハ麻^ハ黃^ハ其^ハ細^ハ條^ハと^ハ簇^ハ着^ハく^ハ嫩^ハ肉^ハ
飯^ハ少^ハ和^ハて^ハ亦^ハ少^ハし^ハ亦^ハ松^ハの^ハ韌^ハあり^ハ老^ハ茂^ハ生^ハば^ハ硬^ハし^ハ高^ハさ^ハ凡^ハ

許馬好食之根茎く土中ヲ入ルと素深し故ニ外齶
瘡のゆく藥力微がいまに加一用シ○松葉茹は此叶の
化る事多シ

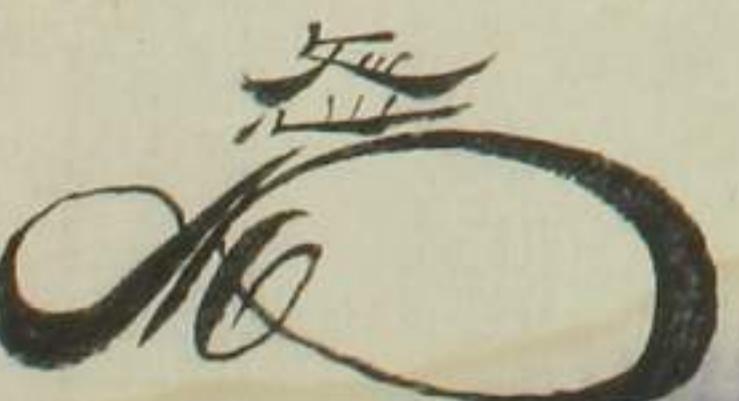
味甘苦く平氣く毒駁レ○主治久一ニ法右廻及下
と止ム多大多く食ハば浮塗瘡エシマツニは接溝竹と搽て附
シ

成形圖說卷之三十終

明治六歲次癸酉十月十六日需出於生雲山

成形圖說全部三十卷

代價壹



鹿兒島
縣民
壁村彦元
住所第一丸正
藏書

小二五拾番地

明治六年癸酉十月十八日需之於生墨市
代金壹圓或步

成形圖說全部三卷冊

十

古冊農事部

十五卷乃至廿卷五種部

自廿一卷至卅卷柒疏部

以第廿卷爲大尾

主
之
野村彦四郎

紀鹿民

